HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語形容詞再考
Author(s)	加藤, 重広
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 129, 63(左)-89(左)
Issue Date	2009-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39997
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS129-005.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 129 (2009)

日本語形容詞再考

加 藤 重 広

1．はじめに

日本語の形容詞は伝統的に「用言」，すなわち活用のある語とされてきた。また，言語類型論では，従来，日本語の形容詞は動詞型とされ，名詞型の形容詞を持つ英語などの西洋語と対比されることが多かった。

本論は，日本語形容詞の特性を明らかにすることによって，従来の文法における形容詞の扱いや品詞体系における位置づけを再考するものである。本論で整理したことを通じて，今後通言語学的視点から再検討を加えることを考えており，本論は次なる考察に対する序編として，いくつかの提案を行うものである。

2．動詞型と名詞型のあいだ

本論では，形容詞というとき，「赤い」「遠い」「悲しい」「面白い」など，基本形がイで終わる，いわゆるイ形容詞のみを指す。「変だ」「不可能だ」など基本形がダで終わる，いわゆる形容動詞は，必要があれば形容動詞と呼ぶ。本論では，加藤重広. 2003 と同様に，最終的に形容動詞という品詞範疇を考える必要がないと結論するが，わかりやすさなどを考慮して便宜的に形容動詞と呼ぶことはあらかじめ断っておく。

2.1 形容詞の用言性

用言として形容詞を位置づけることはすでに近世後半には行われている。

十八世紀後半の国学者富士谷成章は，用言に相当する「装ひ」のなかに事を表すものと状を表すものとに分けた。前者が動詞，後者が形容詞[1] にあたる。同時期の本居宣長も活用の類型を二十七会に整理した『活用言の冊子』において形容詞を廿六会のク活用と廿七会のシク活用に分けつつ含めている。宣長・春庭の流れを汲む八衢派のなかでは，鈴木朖が『言語四種論』において用言（＝用の詞）を形状の詞と作用の詞に分け，富樫広蔭が『詞玉橋』などで用言（＝詞）を説容体詞（ありかたをいふことば）と説動用詞（はたらきをいふことば）に分けているが，いずれも形容詞と動詞に相当する。これは，近代になってもおおむね引き継がれる。

大槻文彦. 1891，1897 は， 8 品詞のなかに小区分をつくらなかったので，動詞と形容詞を用言のようなカテゴリーとして括ってはいないが，いずれにも活用があること，助動詞の活用に動詞型と形容詞型があること，などを述べており，用言に相当する共通性を想定していたことは窺える。山田孝雄. 1908，1936，1950 では，以下のように品詞区分を行っている。

(1)　山田文法の品詞区分

<table>
<tr><td rowspan="11">単語</td><td rowspan="10">観念語</td><td rowspan="9">自用語</td><td rowspan="4">概念語
→体言</td><td colspan="2">実質体言</td><td>名詞</td></tr>
<tr><td rowspan="3">形式体言</td><td>主観的形式体言</td><td>代名詞</td></tr>
<tr><td>客観的形式体言</td><td>数詞</td></tr>
<tr><td rowspan="5">陳述語
→用言</td><td rowspan="2">実質用言</td><td>形状用言</td><td>形容詞</td></tr>
<tr><td>動作用言</td><td>動詞</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">形式用言</td><td>形式形容詞</td></tr>
<tr><td>形式動詞</td></tr>
<tr><td>存在詞</td></tr>
<tr><td colspan="2">（用言の語尾）</td><td>（複語尾）</td></tr>
<tr><td colspan="3">副用語</td><td colspan="2">副詞</td></tr>
<tr><td colspan="4">関係語</td><td colspan="2">助詞</td></tr>
</table>

[1] これにはいわゆる「形容動詞」も部分的に含まれていると見ることができる。

観念語のうち，自用語が体言にあたる概念語と用言にあたる陳述語に分けられ，陳述語は実質用言と形式用言に分けられている。我々の言う形容詞は実質用言の下位区分で，実質用言は，動詞と形容詞から構成される。形式用言は，「ごとし」のみからなる形式形容詞，「す」のみからなる形式動詞，存在詞の「あり」からなる。形容動詞を含めていない点を除けば，おおむね学校文法での用言と，山田. 1908 などにおける実質用言とが近いものと理解してもいいだろう。これについて，山田. 1908：228-9 は以下のように述べている。

> 實質用言とは其の意義に属性観念充實して明瞭に存在せるものにして，形式用言とは其の意義甚廣汎にして朧げに或属性をあらはすと見ゆるもあれど，そは唯極めて形式的なる普遍的観念にして之に實質を有する語を添へでは完全なる意義を成就し得ざるものなり。實質用言の一部分なる形容詞は或實體につきて其がある固定性の性質状態にて存することをあらはすものにして，其の属性観念は更に發動的ならず，固定的存續的の静止的性質状態につきて述べたるものなり。動詞とは時間的發動的の性質状態をあらはすものにして，其の属性観念は時間的制約の下に起れる發作的變遷的性質状態ならざるべからず。

動詞も形容詞も性質状態を表すとした上で，動詞の表す属性観念は時間的制約下に起こる発作的・変遷的なものであるのに対して，形容詞の表す属性観念は発動的でなく，固定的で存続的な，静止的性質状態を表すというのである。これは，動詞が時間的で動きのある観念を表すのに対して，形容詞は非時間的で動きのない観念と理解されることが多い。「非時間的」を「超時間的」と言い表すこともあるが，対比のあり方としては大差ないと見ていいだろう。この点は，重要な指摘であり，再度取り上げることにする。

松下大三郎. 1930：198-9 は次のように述べ，動詞の一種として形容詞を位置づける。

> 日本文典の多くは「遠し」「近し」「長し」「短し」「白し」「黒し」「苦し」「樂し」などの様なものを形容詞と名づけて一つの品詞として居る。しかし此れらは作用を叙述する詞であつて動詞の一種である。其の連詞又は斷句を成す上に於ける文法的性質は他の動詞と大體に於て變わりは無い。其れ故此れらは一品詞に立てる價値が無い。たゞ動詞の小分に於て「行く」「歸る」「云ふ」「有り」等の類を動作動詞とし「遠し」「近し」「白し」「黒し」の類を形容動詞として區別すれば善い譯である。

松下文法では，文にあたる「断句」を構成する「詞」，そしてその「詞」を構成する「原辞」という三段階が設定されたことはよく知られている。「原辞」は，さらに「完辞」と「不完辞」に分けられる。完辞は，現代の言語学でいう自由形態素（非拘束形態素）（free morpheme）に近く，不完辞は拘束形態素（bound morpheme）に近い，と見ることができる。「完辞」はそのまま「詞」にもなる。松下文法の品詞分類は「詞＝完辞」のカテゴリーの分類となっているため，品詞の一種と見なされない「不完辞」に含まれる助詞（＝静助辞）と助動詞（＝動助辞）は品詞分類から除外される。

松下文法の品詞分類をまとめると以下のようになる。

⑵　松下文法の品詞区分

<table>
<tr><td rowspan="6">詞</td><td rowspan="5">単性詞</td><td rowspan="4">概念詞</td><td colspan="2">外延詞</td><td>名詞</td><td>本名詞・形式名詞・代名詞・未定名詞</td></tr>
<tr><td rowspan="3">内包詞</td><td>叙述的（作用）</td><td>動詞</td><td>動作動詞・形容動詞・形式動詞</td></tr>
<tr><td rowspan="2">非叙述的（属性）</td><td>連体</td><td>副体詞</td><td>実質副体詞・形式副体詞</td></tr>
<tr><td>連用</td><td>副詞</td><td>実質副詞・接頭副詞・接続詞・帰著副詞</td></tr>
<tr><td colspan="2">主観詞</td><td></td><td>感動詞</td><td></td></tr>
<tr><td>複性詞</td><td colspan="5">（日本語には存在しない）</td></tr>
</table>

動詞の下位区分には，形式動詞が含まれているが，これは，「研究する」の

「する」や「やってみる」の「みる」など，構造上実質的意義を補充すると松下. 1930 で考える動詞で，おおむね補助動詞と複合動詞後項に相当する。品詞区分というよりは用法区分であるからここでは検討から除外する。「動詞」の下位区分のうち「動作動詞」が，我々が通常「動詞」と呼ぶものに相当し，「形容動詞」が，我々が通常狭義に「形容詞」と呼ぶものに相当する。松下文法の「形容動詞」に，学校文法などでいう，いわゆる形容動詞は含まれない。両者の違いについて，松下. 1930：251 では，以下のように説明する。

> 作用としての認識に於て吾々は必ず空間の形式を要する。如何なる作用も場所なしに行はれるとは考へられない。必ず或る場所で行はれるとして認識する。然るに時間の形式に至つては必ずしも必要でない。時間の形式に由つて考へた場合には動でも静でも動作であり，時間の形式に由つて考へた場合は狀態（形容）である。例へば「汽車が走る」の「走る」は動作である。時間の中に行はれる作用である。しかし「雪は白い」の「白い」は時間は要らない。唯雪の性質を考へただけで雪の動作ではない。

形容詞が，用言として動詞と 1 つのカテゴリーをつくる点は，これ以後の橋本文法でも，それを基礎とする学校文法でも，時枝文法でも変わりはない。いわゆる形容動詞を用言の一カテゴリーとして立てている点で橋本文法は他の文法体系と異なるが，形容詞と動詞を同一のカテゴリーに含める点はどの文法体系でも基本的に同じ見方をしている。

2.2　形容詞の用言性の根拠

なぜ形容詞を動詞と同じカテゴリーにするのかについては，あまり説明がない。これは，橋本進吉. 1937，1938，1959. が「活用を持つもの」として，動詞と形容詞と形容動詞を「用言」に括っていることからわかるように，用言とは活用を持つカテゴリーである。活用を持たない名詞類を「体言」とする品詞分類は，富士谷成章も含めて八衢派以来の伝統であり，自明だという

ことだろう。本論は，有活用かどうかということに疑義を呈するわけではないが，活用の有無を絶対的な基準とすることは再検討の価値があると考える。

言語学的な観点からは，範列関係上の特性が考えられる。これも，ある意味で自明のことなので，いちいち説明されることはないが，日本語の形容詞は英語の形容詞と異なり，コピュラ辞が不要だという言い方で言及されることはある。英語を含む西欧語の多くでは，コピュラ辞は存在を表す動詞が転用されるが，それが ser と estar のように意味的な対立を持つスペイン語のような言語もあり，現在単純時制では省略するのを無標とするロシア語のような言語もあるが，英語のように be 動詞は特に意味的な対立を形式上持たず，省略しないのを原則とする言語もあり，コピュラ辞のあり方は一様でない。とは言え，コピュラ辞が用いられるという点では，それを形容詞に使わない日本語とは対照的と述べてよさそうである[2]。この範列関係上の特性を，ここでは 2 つめの根拠としたい。ここでは，この 2 つの根拠について順次検討を加えることにする。

まず 1 つめは，「活用」である。日本語の動詞が活用を行い，語幹と語尾に分けられることに疑問はない。既に多くの先行研究に指摘があるように，日本語の動詞には，母音語幹動詞と子音語幹動詞の大別を見る。日本語は多くの方言がモーラを単位とするモーラ方言であるが，子音語幹動詞では語幹末が子音となって，語幹は閉音節を含み，モーラ単位で分けられない。例えば，「書く（kaku）」では語幹が kak-となり，/kak/は標準日本語母語話者には理

[2] 日本語のコピュラ辞を「太郎は大学生だ」のなど名詞述部文で述部形成のために必要な「だ」を典型として考えると，じつは，静岡・長野など中部方言には，形容詞にコピュラ辞が後続したかたち「赤いだ」が見られる。しかし，これらの方言では「行くだ」のように動詞にもコピュラ辞は後接する。この「だ」は一般に強意と言われ，「赤いだだ」「行くだだ」と重ねられることもある（中田敏夫. 2002）。また「静かだ」にも「だ」がつけられ「静かだだ」と用いる。動詞にも形容詞にもつき，「X だ」の後にも現れる以上，これはコピュラ辞ではなく，助詞のたぐいと見なすべきだろう。実際中田. 2002：19 では「のだ」に相当する断定の表現としている。加藤. 2006 では標準語の「のだ」を複合的な助動詞と扱っているが，中部方言で用いられる，この種の「だ」を同様に助動詞とすべきか，また，その機能を断定と言うべきか，更なる検討が必要である。

論的な仮構形態であって，そのまま発音することが困難であるか，相当な違和感を伴う。子音語幹動詞の場合は，語尾の母音部分が変わるが，いわゆる未然形･仮定形･希求形（それぞれ「行かない」の「行か」,「行けば」の「行け」,「行こう」の「行こ」）は後続部なしに存在できない被覆形式である。連用形は単独でも連用中止法などで用いるほか，転成名詞にもなり，自立的な形式である。動詞の場合，連体形は終止形と全く同じであるが，これもまた自立的な形式である。自立的な形式，すなわち露出形に対して，非自立的な被覆形が含まれていることが，子音語幹動詞の重要な特徴だと本論では考える。活用の捉え方にはいろいろな考え方があり，そもそも希求形は「行かむ→行かん→行かう→行こう」のように，未然形が転じたものなので，未然形の一種と見ることもある。また，後接の形式で区分しない立場に立つならば，子音語幹動詞の場合，仮定形は命令形と同じなので，必ずしも被覆形と見る必要はなくなる。しかし，未然形だけは，露出形と見なすわけにはいかないので,「子音語幹動詞は語幹が非モーラ単位であり，活用形に被覆形が含まれる」と言ってよいだろう。

一方，母音語幹動詞は，語幹がモーラ単位で音声的に実在性が担保されている。未然形と連用形は語幹と同一であり，連体形と終止形も同一で，これらは露出形である。命令形も露出形と見てよい。「見れば」の「見れ」のような仮定形は被覆形だが，北海道方言など方言によっては仮定形がそのまま命令形になる場合もある。標準語では活用形に被覆形が含まれることになるが，方言によっては被覆形が含まれないこともあるので,「母音語幹動詞は語幹がモーラ単位であり，活用形に被覆形が含まれるのが標準」と言うべきだろう。

さて，本論のテーマである形容詞であるが，学校文法をはじめとする伝統的な活用記述では「高い」「短い」「面白い」は以下のようになる。なお，現代語では命令形はないことになっているので，省略する。

(3) 現代日本語の形容詞の活用表（学校文法）

語幹	未然	連用	終止	連体	仮定
たか	く	く	い	い	けれ
みじか	く	く	い	い	けれ
おもしろ	く	く	い	い	けれ

未然と連用が同一形態で，終止と連体が同一形態であり，それぞれが露出形であること，仮定形が被覆形であること，語幹がモーラ単位であること，などに着目すれば，形容詞は活用のタイプとしては母音語幹動詞のタイプに属すると見てよいであろう。

形容詞が母音語幹動詞と同じタイプの活用分布を見せることは，いわば，用言の活用タイプを動詞と形容詞とに分けるのではなく，Ⅰ型（子音語幹動詞タイプ）とⅡ型（母音語幹動詞・形容詞タイプ）に分ける可能性を示唆する。ただ本論は，従来の用言を再検証することを主眼としているから，述語として用いられる形容動詞と名詞＋コピュラ辞も見てみたい。

(4) 形容動詞と名詞述語の活用表

	語幹・名詞	未然	連用	終止	連体	仮定
形容動詞	静か	で	で	だ	な	なら
名詞＋コピュラ辞	学生	で	で	だ	の	なら

述語文のタイプを子細に見ると「出かけたのは友人とだ」「ゆっくりだ」のように名詞の代わりに副詞句や副詞が現れることもある。しかし，これは活用の変異を見る上では，コピュラ辞を使っている点で名詞＋コピュラ辞と同じであり，その亜種とみておけばよい。

形容動詞の連用形は「静かに話す」のように「に」も現れるが，「静かで，落ち着く」のように「で」も現れる。加藤. 2003. では，前者を修飾，後者を非修飾（並列）と呼んでいる。名詞＋コピュラ辞の場合，「二十歳で，大学生だ」のように非修飾（並列）の用法に限られる[3]。実は，名詞＋コピュラ辞が，

[3] 名詞（形容動詞語幹にならないもの）であれば，「Nに」は原則として副詞的要素になら

連体形で「な」でなく「の」を用いること，連用形で修飾用法に用いないことの 2 点は形容動詞との違いになるものの，それ以外はおおむね同じと見てよい。連体形の「の」や未然・連用形の「で」を助詞とせずに，コピュラ辞「だ」の活用とする見方は，奥津敬一郎. 1983. で既に見られる。名詞＋コピュラ辞についても以上のように活用表をつくることは可能であり，「用言のみに活用がある」あるいは「活用があれば用言である」ことを自明の原理とするのは科学的妥当性がない。「活用」の範囲あるいは定義が明確でなければ，その有無で品詞論的な判断をするわけにはいかない。つまり，「形容詞は活用があるから用言だ」という単純な判断は，活用の明確な規定なくしては成立し得ないのである。この点は，第 3 章で再度論じる。

もう一つの根拠は，範列関係上の特性であった。

(5)　太郎は，歌う。
(6)　太郎は，優しい。
(7)　太郎は，有能だ。
(8)　太郎は，大学院生だ。

「歌う」という動詞，「優しい」という形容詞はそのまま述部になれる。「有能だ」という形容動詞も 1 語でそのまま述部になれる。「大学院生だ」は 2 語ゆえ，「大学院生」という名詞は単独で述部になれない。「だ」は脱落することがあるものの，それは脱落したのであって，単独で名詞が述部になったわけではない。よって，動詞・形容詞・形容動詞は単独で述部を形成できる点で，範列関係をなす。以上が，おおむね伝統的な品詞体系論での説明になるだろう。

このうち，形容動詞が 1 語で，名詞＋コピュラ辞が 2 語であるとする枠組みの矛盾は，すでに加藤. 2003. で指摘してあるので繰り返さない。

ない。「Nになる」「Nに変わる」など補語に相当する場合は「に」も用いられるが，これは修飾用法には含めない。

(9)　太郎は，歌います。　（連用形＋敬体助動詞）
(10)　太郎は，優しいです。　（連体形＋敬体助動詞）
(11)　太郎は，有能です。　（敬体）
(12)　太郎は，大学院生です。　（名詞＋敬体コピュラ辞）

常体を敬体に変えるには，名詞は「だ」という常体コピュラ辞から「です」という敬体コピュラ辞へ置換すればよいが，動詞は「ます」を，形容詞は「です」をそれぞれ後接させる。つまり，これらは，品詞の外部に付加する要素で文体的対立を形成している。これに対して，形容動詞は活用語尾の「だ」を「です」に置き換えることで敬体になるが，形容動詞だけ「有能だ」と常体の形式と「有能です」という敬体の形式の 2 つを持っており，1 品詞の内部に文体的対立を包摂していると説明されることが多い。少なくとも，学校文法はいまでもおおむねこの枠組みを踏襲している。形容動詞というカテゴリーは，記述や説明の経済性に大きく背馳するほか，特定の品詞だけ，文体的対立を持つという一貫性のない規定になっている。ただ，敬体の体系が近世後半から近代にかけて比較的短い時期に完成したという史的事実を踏まえると，敬体あるいは文体的対立の記述だけを根拠に形容動詞というカテゴリーをすぐに廃止すべきだということにはならないだろう。本論の特に論ずるべきは形容詞のほうなので，形容詞の分析に話を戻さなければならないが，形容詞と比較するために動詞について簡単に確認しておこう。

動詞は連用形に「ます」を後接させるが，このときの連用形は自立性を欠き，被覆的連用形である。

(13)*　歌いはます
(14)　歌いはします。
(15)　歌いはする
(16)　歌わない
(17)*　歌わはない
(18)　歌いはしない

「歌います」の「歌い」と「ます」の間に「は・も・すら・さえ・だけ」などの副助詞をはさむことはできない。これは，母音語幹動詞でも子音語幹動詞でも全く同じである。母音語幹動詞は，語幹が未然形･連用形と同一であって，そのままモーラ単位となり，一方，子音語幹動詞は，語幹が非モーラ単位であって，被覆形の未然形と異なるかたちの連用形を用いる。副助詞がそのまま割り込めないのは「歌わない」など未然形＋否定辞「ない」の場合でも同じであり，これも事情は母音語幹動詞と子音語幹動詞で共通している。

「歌い」を「歌う」という動詞の連用形として現在の活用論ではそれ以上区別しないのが普通であるが，大槻. 1897. などでは，「行きます」など助動詞や動詞に後続する形（本論で暫定的に連用形Ⅰとする。以下同）と「行き，」と連用中止法に用いる形（連用形Ⅱ），「行きは新幹線」など転成名詞に用いる形（連用形Ⅲ）を区別している。連用形Ⅰは被覆形であるが，連用形Ⅱと連用形Ⅲは露出形であり，見かけ上は同じものであっても，統語形態論上の性質が異なることは考えておく必要がある。李. 2008. では「開け閉め」「上り下り」など日本語では名詞にしか用いない複合形が韓国語では動詞としても用いられるという違いを指摘しているが，「開け始める」の「開け」は連用形Ⅰであるのに対して，「開け閉め」の「開け」は連用形Ⅲである（前者は被覆形で，後者は露出形）と考えると説明しやすくなる。加藤. 2007. では，連用形Ⅰを**被覆的連用形**，連用形Ⅱと連用形Ⅲを**露出的連用形**として区別することを提案している。もちろん，被覆的連用形と露出的連用形は形式上全く同じである。母音語幹動詞の場合は，連用形が語幹と同じ形をしているので，語幹と連用形・未然形を一括して被覆と露出の対立を設定することも可能であるが，この点は本論では議論しない。

さて，形容詞はさきほど確認したように，敬体にするには「です」を後接させるだけである。現代の形容詞は終止形と連体形の形式上の対立を持たないので，「優しいです」の「優しい」がいずれであるかは，現代語では決しにくい。「です」が名詞的なものに後接することから，名詞的特性を持つと見ることはできるが，古典語の場合と異なり，現代語では形容詞の連体形が名詞的とは必ずしも言えない。

⑲　優しきを　［文語］
⑳*　優しいを　［口語］

古典語であれば実際に名詞を修飾する連体形（暫定的に連体形Ⅰとする）と⑲のように名詞相当表現に用いる連体形（連体形Ⅱ）の両方があったが，現代語に連体形Ⅱの用法は引き継がれず，「の」を用いて名詞化する方法が代替的に用いられている。「です」は「にてさぶらふ」の縮約によると一般に考えられるので，格助詞「に」の統語的性質により名詞もしくは名詞相当表現に上接すると考えられる。「優しきにてさぶらふ」がそのまま現代語に引き継がれたとすれば「優しいです」ができあがるので，「優しいです」の「優しい」を連体形と見なす根拠があることになる。問題は，あまりにも形態が変わってしまっていることである。ただ，活用形がいずれであるにせよ，「優しいです」は形容詞に形態コピュラ辞が付いていると見ざるを得ないことは確かである。もっとも，「です」はこのとき，陳述への関わりが希薄でコピュラ的性質を認めるわけにはいかない。機能的には，文体的な有標性（これが敬体性に相当する）を示すだけと言ってもよいであろう。

「大学院生です」も，名詞に敬体コピュラ辞がついていると見ることができるので，その点は形容詞の場合と変わらない。名詞のあとの「です」は，文体的な有標性だけでなく，コピュラ性も喪失しておらず，「です」によって陳述性を明示している点が異なるだけである。名詞は単独で，明示的陳述性を持たないので，コピュラ辞（常体であれば「だ」，敬体であれば「です」）によって陳述性を与えられて，述部になる。「僕は大学院生」のように名詞単独で述部になるのはコピュラ辞の脱落であるが，これは構文的に陳述性を与えられていることになる。

このことを以下のようにまとめておこう。

㉑　形容詞述語の敬体は，形容詞＋デスとなり，デスは文体的有標性を表示するのみである。名詞述部の敬体は，名詞＋ダを名詞＋デスに変えてつくり，デスはダと同じ陳述性を持つとともに，文体的有標性も表す。

重要なのは，形容詞に付く「です」はコピュラ性という本来の性質では用いられず，文体的マーカーとしてのみ用いられている点である。

さて，形容詞の場合も，副助詞がそのまま割り込めない点は動詞と同じである。

(22)* 優しいはです。
(23) 優しくはあります。
(24)* 大学院生はです。
(25) 大学院生ではあります。

形態論的に可能ではあるが，じっさいに(23)(25)はあまり自然とは言えない。ただ，ここでは形態統語論的に論じているので，自然発話としての妥当性は考えない。「は」の代わりに「も・こそ・さえ」でも事情は同じである[4]。副助詞を割り込ませると「です」が「副助詞＋あります」の形式になる点は名詞でも変わりがない。しかし，形容詞は「優しい」という連体形ではなく，「優しく」という連用形になっている。「優しく」など語幹＋クの形式を持つ連用形は露出形だと言える。語幹＋クは未然形の場合でも同じであるが，これもそのまま副助詞の割り込みを許す。

(26) 優しくない
(27) 優しくもない
(28) 大学院生でない
(29) 大学院生ではない

名詞述部の場合は，コピュラ辞の「だ」を「で」に変えることになるが，

[4] ただし，「だけ」は「優しいだけであります」のようにしないといけない。これは「だけ」が「丈」という名詞に由来する形式名詞の副助詞化が完全に完成していないと見ることもできるが，別途論じる機会をつくりたい。

事情は同じである。形容詞の未然形と連用形は「優しく」のように同一の形をしているが，これらは動詞のように被覆と露出の違いがなく，等しくすべて露出形である。形式的対立も機能的対立もないのなら，記述の経済性を考えれば，別段区分する必要はないことになる。

動詞の場合は，未然形はすべて被覆形であり，連用形には露出と被覆の対立があった。終止形と連体形は形式上同一で露出形ゆえ，統合してしまうことが可能である（以下では，加藤. 2006. に従い，「基本形」としている）。また，命令形も露出形だが，単独で発話行為性を持つ点で区別される。仮定形は本質的に被覆形と見るべきだろうが，母音語幹動詞と子音語幹動詞での違いが見られる。

形容詞は，未然形も連用形も同一形態で被覆と露出の対立もないので統合することが可能である（以下では暫定的に「修飾形」と呼ぶ）。終止形と連体形の事情は動詞と同じと見てよい。命令形は活用形態として伝統文法では認めないが「する・なる」を軽動詞として用いれば「優しくしろ・優しくなれ」という命令表現はつくれる（加藤. 2003.）。問題は，仮定形であるが，「優しければ」のように，ケレという形態が現れる。これは，通時的には「ク＋アレ」の縮合に母音交替が生じたと見ることができるが，「あり・ある」という動詞が関与している点が重要である。仮定形と命令形は，違う形で再度検討することにして，ここでは，残りの 4 つの活用形のとらえ方を伝統文法と本論の違いが明確になるように，整理しておこう。

⑶⓪　動詞のとらえ方の違い

伝統文法	未然形	連用形		終止形	連体形
本論	未然形	被覆的連用形	露出的連用形	基本形	
被覆性	被覆的		露出的		

(31) 形容詞のとらえ方の違い

伝統文法	未然形	連用形	終止形	連体形
本論	修飾形		基本形	
被覆性	露出的			

実は，名詞述部の場合もコピュラ辞の分布は形容詞に近い。大きな違いは，終止形と連体形が形態的に対立するため統合できないことであるが，未然形と連用形は同じように扱える。

2.3 形容詞の用言性は自明でない

以上，見てきたことから言えることは，議論なしに「形容詞と動詞は１つの品詞カテゴリーを形成する」とは結論できないということである。この場合の品詞カテゴリーは「用言」と呼ばれているが，「形容詞が動詞と同じく用言に属する」という見解が成立しないわけではないものの，それには活用をどう捉えるかなどいくつか事前に確定させておくべきことがある。つまり，形容詞が用言であることは自明だ，とは言えないのである。

以上，見た限り，形容詞は名詞述部によく似た特質を持っている。本論は，少なくとも，形容詞は，これまで考えられてきた以上に，より名詞述部に近い，と主張するものであるが，動詞と形容詞に共通性がなく，用言という品詞概念に全く実体性がないと考えるわけではない。

以下では，2.2. で検討したこと，また，検討し残したことをもう少し子細に見てみたい。

3．軽動詞アルの関与

前章の活用形に意図的に取り上げていない形式がある。過去や完了などを意味するとされる「た」に続く連用形である。

(32)　走った／飛んだ／貸した／見た／食べた

(33)　走って／飛んで／貸して／見て／食べて

動詞が「た」に続く形態は，接続助詞「て」に続く形態と全く同じである。そして，これらの活用形は連用形とされている。母音語幹動詞は，語幹が未然形と連用形を兼ねるので，子音語幹動詞のうち，語幹末子音が/s/である動詞は，kas-i-ta のように連用形であることが確認できる。「走っ」は「走り」という連用形の促音便であり，「飛ん」は「飛び」という連用形の撥音便であることが通時的に推定可能である。よって，これらの活用形を決める時に連用形が選ばれるのはごく当然の判断である。

しかし，古典語と異なり，音便が選択的に生じるわけではなく，非音便形は現代語で見られない。つまり，「走りた」「飛びた」という形態は存在しない。それで，伝統文法では「走る」の連用形に「走り」のほかに「走っ」も含めている。伝統文法は，音節単位で語幹・語尾を決めるので「走る」の語幹は「はし」であり，活用語尾の連用形に「り」と「っ」を認めることになる。後者は，特殊拍音素であり，実体性がないので，記述として違和感はあるものの，不整合はない。子音語幹動詞を認める形態論では，「走る」の語幹は/hasir/である。この場合，「走った」などでは語幹末子音/r/が保持されないことになり，変化せざる部分という語幹の定義に不整合が生じるほか，hasir-i-ta → hasi-Q-ta を派生する手順の記述が必要になるので，効率的でない。

では，形容詞の場合はどうであろうか。

(34)　優しかった／優しくて
(35)　大きかった／大きくて

形容詞の場合，語幹に「かった」をつければ，タ形になるので，「かっ」が活用語尾として，「く」以外に連用形に追加されることになる。動詞のように，記述が煩瑣になったり，活用タイプを 2 種類に分ける必要はないので，一見単純である。

通時的に見ると，「優しかった」は「優しかりたり」から末尾の「り」が落ちる形で現在の「た」になり，「り」が促音化する音便を生じたものである。これは，既に定説であり，手順の適用順序などの違いはあっても，基本的な説明に大差はなく，検討しなければならないような問題も見あたらない。しかし，本論では，「優しかりたり」が「優しく･あり･たり」の縮合であって，「あり」という動詞（現代語では「ある」なので，以下，アルと表記する）が含まれていることに着目したい。古典語の形容詞であれば，いわゆるカリ活用と言われる系列が平行して存在しているが，現代語では明確に 2 系列に分離しにくく，両者が混交する形になっている。

(36)　優しかろ-う
(37)　優しかっ-た
(38)　優しけれ-ば

「かろ」を未然形，「かっ」を連用形，「けれ」を仮定形とすると，これらは本来的にアルを含み，その形態音韻的変化によって，これらの活用形を持つにいたっている。通時的変化を大まかに見ると以下のようになる。

(39)　優しく-あら-む→優しく-あろ-う→優しかろ-う
(40)　優しく-あり-たり→優しく-あっ-た→優しかっ-た
(41)　優しく-あれ-ば→優しかれ-ば→優しけれ-ば

いずれも「優しく」にアルが続く形で，「く」とアルが含まれている。古典語のカリ活用も「く＋あり」の縮合と活用によるので，その点は継承されていると言えるだろう。九州方言など「優しか」と語末に「か」が現れるのは「優しかり」の「り」が脱落したものと見られているから，形容詞語尾における「く」とアルの親和性は非常に強いと考えるべきである。以上の活用も含めて整理すると，以下のようになる。

(42)　形容詞活用形とク・アリの包摂

伝統文法	形式	クを含む	アルを含む	クとアルの融合
未然形	優しく	○		
	優しかろ	○	○	有
	優しくあろ	○	○	無
連用形	優しく	○		
	優しかっ	○	○	有
	優しくあり	○	○	無
	優しくあっ	○	○	無
終止形・連体形	優しい			
	優しくある	○	○	無
仮定形	優しけれ	○	○	有
	優しくあれ	○	○	無

アルが含まれる場合は，必ずクが含まれる。つまり，アルが現れるのはクが後接して(31)でいう修飾形になった場合に限られる。修飾形が副詞的な要素だとすると，軽動詞であるにせよ，当然のことながら動詞の性質を持つアルが連用修飾的要素と１つの機能的まとまりをなすのは，一般的な統語原則にも合致している。終止形・連体形は，従来の活用記述においては，本論で基本形と呼ぶ「優しい」といった形のみを認めているが，上のようにク・アリの後接という観点から整理すると，副助詞がクとアルの間に置かれる場合以外にも「優しくあるべきだ」「優しくあるべき立場」[5] など後続する要素の要求

[5]「べきだ」に続く「優しい」が終止形か連体形かは，現代語に関する限り，決めることが難しい。松下. 1930. は，「べし」が文語の終止形に下接することについて，実際には「終止していない」ので，「終止形」とは便宜的な活用形の名称であることを指摘しているが，これが承接形態制約を表す名称でないことが明らかであるにしても，共時的には終止と連体の区分そのものが難しく，いずれであるかも定めにくい。形態的区分を持つと言える形容動詞でも「静かだべきだ」「静かなべきだ」はいずれも東京方言では適格形でなく，「静かであるべきだ」としなければならず，「べきだ」の特性の問題もあって，整理しにくい。

によって現れる「優し-く＝ある」も考えるべきである。

また，加藤. 2003. が言うように，アルの位置にスルとナルが現れることもあるが，この場合も，クは必ず含まれる。ただし，アルのように音韻的変化を生じない。アルは「ある」という存在の意の自動詞に由来するが，アルが後接しても，クとアルが融合する場合には，形容詞は形容詞としての特性を変えないと見ることができる。これは，「ある」が非時間的解釈を無標とする点，状態性を意味に含んでいる点で本来的に形容詞に近いからであろう。

一方，軽動詞スルとナルを後接させると，全体が動詞になるが，「する」「なる」は時間的表現であり，非状態性あるいは動作性を意味に含むからだと考えられる。ただし，クとアルが融合せずに分離したままの形式では，「ある」の自立性は相対的に高く，「ある」自体の動詞としての特徴が強く保たれていると見ることができる。「優しかれ」は文語命令形と認めることができるが，現代語の命令形と見ることはできない。しかし，「優しくあれ」（以下，修飾形＋アレと表す）は「優しくしろ」「優しくなれ」（以下，それぞれ修飾形＋シロ，修飾形＋ナレと表す）と同じように命令形と認めるべきだろう。加藤. 2003. では修飾形＋シロを自己意志制御性のある命令形，修飾形＋ナレを自己意志制御性のない命令としているが，これに修飾形＋アレも含めて整理し直す必要がある。修飾形＋ナレが属性の変化（属性を帯びること）を意味するアスペクチュアルな表現であるのに対して，修飾形＋アレは属性の所有の継続を意味する非アスペクチュアルな表現として対立関係を形成している，と見ることができる。

以上を踏まえて，本論は，形容詞の活用について，以下のように整理したい。

(43)　活用Ⅰ（基本形）
「優しい。」「優しい人」など従来の終止形と連体形はまとめて基本形とする。これは，語尾に「い」を含む。

(44)　活用II（修飾形）

「優しく」など，後続に被修飾要素，並列要素，あるいは「ない」「て」が現れる形。語尾に「く」が現れる。従来の未然形と連用形の一部を統合したもの。

(45)　活用III（アル融合形）

語尾に「く」と軽動詞「ある」が含まれ，両者が形態的に融合してしている。形式上，未然形「かろ」，連用形「かっ」，仮定形「けれ」に下位分類できる。

(46)　活用IV（アル分離形）

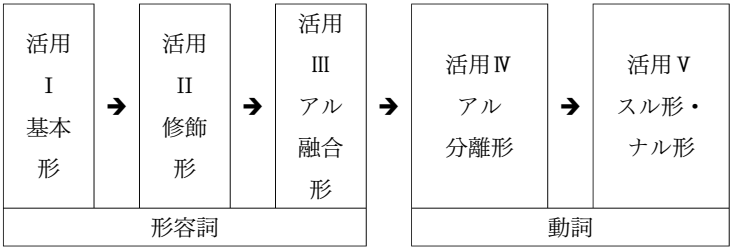
語尾に「く」を用い，それに軽動詞「ある」を後接させた形。「く」と「ある」の間に副助詞などの要素が入る場合のほか，後続する形式の特性により用いられる。命令形にすることができる。

(47)　活用V（スル・ナル形）

語尾に「く」を用い，それに軽動詞「する」「なる」を後接させた形。全体が動詞の統語特性を持つ。「なる」を後接させると変化を表す自動詞をつくる。「する」を後接させると，意志的動作を表す自動詞，もしくは，他動詞をつくる。命令形にすることができる。

図式にすると，以下のようになる。

(48)　形容詞活用の形態階層



厳密な意味での「形容詞の活用」は活用IIIまでである。活用IVとVは，加

藤. 2007. で言う弱境界（weak boundary）を含み，品詞カテゴリーが変わる（従って，格シフトも変わりうる）ので，加藤. 2003. 同様に，厳密な意味での「形容詞の活用」に含めることはできないが，以上のような派生段階を考えれば，その段階の１つと見ることができるだろう。

重要なのは，アルが融合的に用いられる活用Ⅲまで，形容詞の活用と見ている点である。しかし，アルが融合せずに用いられる活用Ⅳと活用Ⅲは，いずれもクとアルを含むもので，連続的な関係にある。従って，活用Ⅳまでを形容詞と見る考えもありうるが，ここでは，活用Ⅲまでを，本来的な形容詞の変化の範囲に含め，形容詞について以下の基底形を考えておくことにする。

(49)　形容詞の基底形

語幹	ク	アル

このとき，語幹とクの間に他の要素が入ることはできないが，クとアルの間には他の要素の介在が許される。クとアルのあいだで形態的な融合が生じれば，もちろん介在は許されないが，そうでなければ，弱境界が生じうる。ただし，これは活用Ⅲと活用Ⅳのあいだに常に弱境界が存在するのとは異なり，活用Ⅱと活用Ⅲのあいだでは熟合度がそれだけ高いと見ることができる。

(50)　優しかった。（活用Ⅲまで，ⅡとⅢの熟合）
(51)　優しくあった。（活用Ⅲまで，ⅡとⅢは熟合せず）
(52)　優しくはあった。（活用Ⅲまで，弱境界の直後に副助詞）

この３つを見ると，(51)は不自然である。これは，熟合可能な場合は，熟合するのが無標であって，(51)のように熟合可能なのに熟合せず分離させておくのが有標だからである。有標であることは，それが有機能的ならば問題ないが，(50)と(51)は知的意味が同じであり，有標で用いる根拠がないために不自然になると考えられる。文体的に有標性が受容されることがありうるなら，(51)は成立するのであろう。(52)は副助詞が介在することで，弱境界が顕在化し，

熟合はブロックされている。

(53)　優しい　←　　優し＋く＋ある
(54)　優しくさえあれば　　→　　優しくありさえすれば

以上の考え方は，(53)のように語幹＋ク＋アルを基底に想定するものの，無標の場合は，基本形に戻されて「優しい」になるということであり，ク＋アルが顕在化を許されるには，(54)のように副助詞を介在させるなど一定の条件が満たされていなければならない，ということである。(54)のサエは形容詞修飾形のあとに現れてもよいが，動詞連用形のあとに現れることもできる。アルは軽動詞であっても，本来的には動詞なので，「優しくありさえすれば」のようにすることもできる。この場合，「優しい」という形容詞の根底に「く＋ある」が隠れているように，動詞の根底には「する」が隠れていると考えられる。そして，このことは，動詞に副助詞を介在させようとすれば軽動詞スルが現れることからも確認できる。

(55)　行く＋さえ　　→　　行き＋さえ＋する
(56)　食べる＋も　　→　　食べ＋も＋する
(57)　話す＋は　　→　　話し＋は＋する

この種の軽動詞アルとスルの対立は，一見すると，動作性と状態性といった意味素性で決まるようにも見えるが，実際は，動詞はスル，形容詞はアル，のように機械的に決まっている。このため，いわゆる状態動詞でも，可能動詞でも，受動形でも，テイル形やテアル形でもスルが現れる。

(58)　部屋にいる　　→　　部屋にいもしない
(59)　英語が書ける　　→　　英語が書けはする
(60)　演奏できる　　→　　演奏できさえする
(61)　壊される　　→　　壊されはしない

(62)　待っている　→　待っていもしない
(63)　用意してある　→　用意してありすらする

一方，形容動詞と名詞述部の場合も現れるのは，アルである。

(64)　静かだ　→　静かでもある
(65)　会社員だ　→　会社員ではある

ここでは，形容動詞を名詞述部の亜種と扱って議論を効率化しておくことにしよう。(49)と同じように名詞述部の基底形を考えると，以下のようになる。

(66)　名詞述部の基底形

名詞	デ	アル

名詞述部も軽動詞アルを用いる点では，形容詞と同じであり，デが連用形をつくる形式で，名詞＋デを修飾形と見なせる点も重要な共通点である。ただ，形容詞は最も単純な叙述となる場合，基本形が使えるならば基本形のみを用い，基底形をそのまま実現させることはないが，名詞述部の場合は，基本形でも基底形そのままでも，いずれでもよい。即ち，基底形を「赤くある」と想定してもこのままでは実現されず「赤い」としなければならないが，名詞述部の場合，基底形「快晴である」「完璧である」はこのままでも実現可能であり，基本形「快晴だ」「完璧だ」でもよいのである。基本形のほうが無標であり，「である」の形は近代以降翻訳文体を通じて普及したという背景事情はあるものの，現在の日本語を見る限り，いずれも成立すると考えるべきである。興味深いのは，名詞はそれだけで自立的な形態であることは疑いなく，「太郎が」のように名詞の後ろには助詞を置くこともできる。しかし，述部として用いた場合には，デの前に境界は想定されず，デのあとに弱境界を認めるだけ，という点である。これは，形容詞の場合と全く同じである。例えば，「会社員だ」「会社員である」は，「会社員-で＝も＝ある」とは言えるものの，

「会社員-が-で＝ある」とはできない。もちろん，「会社員がではありますが」のように言うことはあるが，それは「会社員が」に「だ」がついたのであって，「会社員だ」に「が」が割り込んだわけではない。つまり，名詞を核にしていても述部になる以上は，「会社員で」という修飾形(伝統文法では連用形)にした上で「ある」をつけるのであり，デとアルの間に弱境界を認めるわけで，これは形容詞の場合と同じように捉えることができる。

以上，観察し，整理してきたことから，本論では，形容詞は従来考えられてきた以上に，名詞（厳密には名詞述部）に近い性質を持っていると考えるべきだと主張したい。この見方は，無検証に用言というカテゴリーを設定して，そこに動詞と形容詞を放り込むという乱暴な品詞体系論の再検証を迫ることにもなる。

4．まとめと検討すべき問題

形容詞に活用があることを認めるにしても，それは動詞の活用と同質のものではないと本論では考える。活用表をつくるなかで，同質の活用を想定するようにすり込まれてきただけであるようにも思える。そして，形容詞の活用に似た形態的バリエーションは名詞述語にも想定でき，それを活用と呼ぶかどうかは，活用という概念の規定に依存する。

Backhouse. 2004. は，形容詞（いわゆるイ形容詞）と形容動詞（ナ形容詞）をそれぞれ，inflected adjective と uninflected adjective として，活用の有無で分けている。また，両者を動詞的形容詞と名詞的形容詞として，分裂型の形容詞（split adjectives）として日本語の通言語学的特徴を捉える考えも見られる。加藤. 2003. では，形容動詞(の語幹)と名詞のほうが，形容動詞と形容詞よりも，格段に連続性が強いことを確認して，形容動詞という品詞を廃することを提案している。

八亀. 2007, 2008. は，Givón. 2001. のほか主に Croft. 2001. などを参考に，名詞と動詞の間に形容詞を置き，３つのカテゴリーの関係を捉えようとしている。名詞→形容詞→動詞という配列は，言語類型の基準を考える通言語的

出発点としては示唆に富むが，本論で見たことを踏まえる限り，名詞と動詞を想定し，名詞の中にその亜種として形容詞を置くか，名詞の外側でごく近いところに形容詞を置いて名詞と形容詞を緩く括るようなカテゴリーを想定するほうがよいのではないかとさえ思えるのである。

また，形容詞の下位分類は，感情形容詞と属性形容詞のように，意味的特性の違いとして現れる点や格シフトのように統語的特性の違いとして記述できる点からなされることが，これまでは多かった。しかし，形態論的にも，考えるべき点がある。例えば，「長い」の語幹「なが」は，「長火鉢（なが＋火鉢）」のようにも，「足長（足＋なが）」のようにも，複合形成が可能なだけでなく，「長々（なが＋なが）」のような畳語法も可能である。現代では残存するのみだが，「長の暇（ながいとま）」のような言い方もある。一方，「短い」はごく小さい例外が見つからないわけではないが，いずれにも用いない。これには，音節やモーラといった音韻的特性や，語史的事情も関わっていると思われるが，語幹の自立性を境界に関する特徴と関連づけて考えることもできると思われる。

また，形容詞類が比較級を表す形態変化をする英語などの言語と違い，日本語は形態的に比較級を想定しないのがふつうである。「より大きい」の「より」は助詞から副詞への語彙化の一種だが，翻訳文体で導入され，普及したものであり，本来的には副詞として用いなかった。「こっちのほうが大きい」だけで，This is big. ではなく This is *bigger*. の意にあたる[6] ことから，日本語の形容詞はそもそその原級に比較級も含む（あるいは，その逆）という考えもある。比較に用いるかどうかは，程度性の有無の問題であり，日本語の場合程度性は数量性と連続的である上に，名詞にも段階的な名詞なものとそうでないもの（非段階的な名詞）が見られる。例えば，「かなり美男子」はよいが，「かなり大学生」は不適格であり，区分が見られることはすでに加藤.

[6] 日本語では「NP のほう」というマーカーがあり，対応する英訳では，This に文アクセントを置かなければならず，この点は無視できないが，これも詳しく論じる機会を別に設けることにする。

2003．に指摘があるが，その区分がどのように生じるかにはまだ解明すべきところがある。

以上のように，日本語形容詞について通言語学的検討に資する記述・分析とするには，考察すべきことがいまだ多く残っている。今後，機会をつくって考察の範囲を広げ，分析を掘り下げていき，続篇として形にしたいと考えている。本論は，日本語形容詞の通言語学的分析の「序」として，その論点と分析の方向性を示すものである。

参考文献

李　忠奎. 2008.『日韓語の動詞結合に関する対照研究』（未公刊），北海道大学大学院文学研究科提出学位論文

大槻文彦. 1891.『語法指南』東京：大槻文彦（勉誠社復刻版，1996，『日本語文法研究書大成　7　語法指南』北原保雄，古田東朔編）

————. 1897.『廣日本文典』東京：大槻文彦

奥津敬一郎. 1983.『「ボクハ　ウナギダ」の文法：ダとノ』（増補版）東京：くろしお出版

加藤重広. 2003.『日本語修飾構造の語用論的研究』東京：ひつじ書房

————. 2006.『日本語文法入門ハンドブック』東京：研究社

————. 2007.「日本語の述部構造と境界性」『北海道大学大学院文学研究科紀要』122 号，pp. 97–155

中田敏夫. 2002.『静岡県のことば』平山輝男編，東京：明治書院

橋本進吉. 1937.『改制　新文典　初年級用』東京：冨山房（文部省検定済）

————. 1938.『改制　新文典　上級用』東京：冨山房（文部省検定済）

————. 1959.『橋本進吉博士著作集第七册　國文法體系論（講義集二）』東京：岩波書店

松下大三郎. 1930.『改選標準日本文法』東京：中文館（勉誠社復刊版を参観）

八亀裕美. 2007.「形容詞研究の現在」『日本語形容詞の文法』工藤真由美編，東京：ひつじ書房　pp. 53–77

————. 2008.『日本語形容詞の記述的研究：類型論的視点から』東京：明治書院

山田孝雄. 1908.『日本文法論』東京：宝文館

————. 1936.『日本文法学概論』東京：宝文館

————. 1950.『日本文法學要論』東京：角川書店

Backhouse, Anthony E. 2004. “Inflected and Uninflected Adjectives in Japanese”, Dixon, R. M. W. and Aikhenvald, Alexandra Y. (eds.) *Adjective Classes*, Oxford:

Oxford University Press, pp. 50–73
Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: syntactic theory in typological perspective*, Oxford: Oxford University Press
Givón, Talmy. 2001. *Syntax*, (two volumes) revised edition, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins